

大山町埋蔵文化財調査報告7  
主要地方道宇奈月大沢野線道路改良工事  
(極楽橋建設)に係る埋蔵文化財発掘調査

富山県大山町

# 原砦跡発掘調査概要

1997年3月

富山県大山町教育委員会



原 番 跡

## 序

大山町は、古くから暴れ川として知られてきた常願寺川の左岸に位置しています。そして、近世に入り、常願寺川が形成した扇状地の扇頂部から扇央部にかけて、私たちの祖先は生活の舞台を広げてきました。したがって、それ以前は水害から身を守るために河岸段丘面が生活の中心場所だったのです。そのように考えると、常願寺川だけでなく、熊野川や黒川によって形成された段丘面も全て古くからの生活の場所であった訳で、その代表的なものとして東黒牧上野遺跡を挙げることができるのです。

しかし、今回の原砦跡調査は、余りにも急峻な地であり、周囲の景観からして素人目にはとても砦跡とは考えられないような地形でした。加えて、調査が7月から9月にかけ、全く木陰のない炎天下での作業だったことです。日程に追われながら難渋をきわめることも多かったように思います。

調査の概要や成果については、この報告書をお読み頂ければと思いますが、この調査を機に当町に数多く残る中世の山城跡や古くから言い伝えられている山岳信仰に関連する地などが調査され、伝承が実証されるような遺跡や遺物などが発見されればと大きなロマンを抱いている次第です。

終わりになりましたが、今回の調査に際し、幾度も現地に足を運びながらご指導をいただきました富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や富山県富山土木事務所の皆様に心から感謝申し上げます。

平成9年3月

大山町教育委員会

教育長 津田憲一

## 例　　言

1. 本書は、主要地方道宇奈月大沢野線道路改良工事（極楽橋建設）に先立つ、富山県上新川郡大山町原砦跡の発掘調査報告である。

調査期間及び面積は、以下の通りである。

調査期間 平成8年7月15日～平成8年9月20日 発掘面積 2,500m<sup>2</sup>

2. 調査は、富山県の委託を受け、大山町教育委員会が実施した。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査指導員の派遣を得た。

3. 調査事務局は大山町教育委員会におき、課長代理谷村豊彦・同主事野中由希子が事務を担当し、教育課長松本茂夫が総括した。

4. 調査参加者は、以下のとおりである。

調査担当者 大山町教育委員会主事（学芸員） 野中由希子

調査指導員 富山県埋蔵文化財センター企画調整課主任 安念 幹倫・同文化財保護主事 高梨 清志

5. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を得た。また、発掘調査から本書の作成にあたり、下記の方々から有意義な指導・援助をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。

岸本雅敏、上野 章、宮田進一、高岡 徹、神保孝造、久々忠義、松島吉信、酒井重洋、島田修一、越前慶祐、高慶 孝、三鍋秀典、柴垣智子、山元 勉、浅野 静、山元重男、高尾建設株式会社・地元原・本宮地区

6. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得、野中が担当した。

7. 調査参加者は次のとおりである。

大野良信、岡崎智恵子、岡田 雄、金山紀美子、北野喜代美、窪木哲夫、佐々木睦美、清水宗正、下浦昭子、新谷セツ子、杉本与一、高柳ミサコ、高尾登代美、高尾美津、高村トシイ、高村長俊、田村清一、塚田貴盛、中村忠雄、寺島喜美子、永井早苗、橋爪智子、橋場雅美、林ミツ子、原井正吉、針田栄子、藤中幸喜智、深山靖夫、細木友子、前田千代、松井尚栄、毛利鈴子、森野幸子、森田 裕、山本一秋、山本順之、山本照子、山元紀江、加藤雅子、佐伯亜由美、櫻尾亮二、中川健二、細田秀輝、水岡幸江（現地作業員） 永井早苗、林ミツ子（整理作業員）

## 目　　次

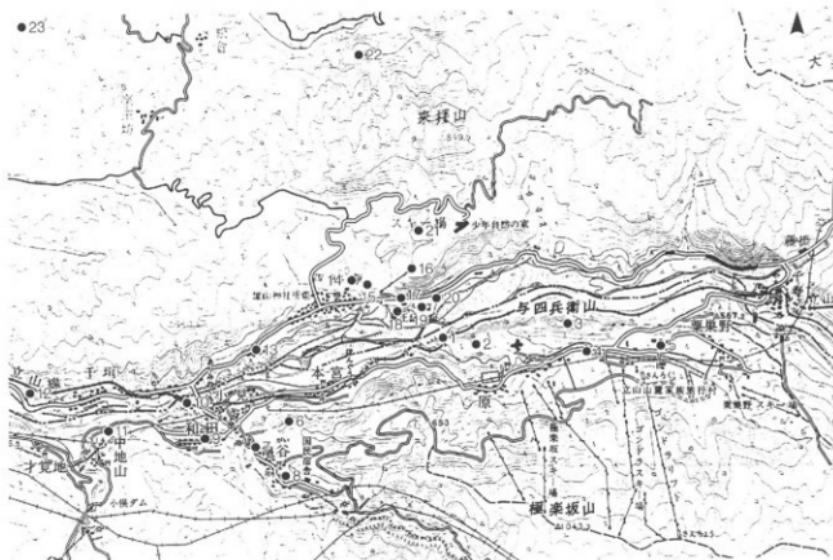
I 遺跡の位置と環境	1	第6図 遺構全体図	7
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第7図 堀切状遺構実測図	11
II 調査に至る経過	3	3. 遺物	9
第2図 遺跡周辺の地形図	2	第8図 遺物実測図	14
第3図 地形と区割図	4	第9図 遺物実測図	15
III 調査の概要	5	第10図 遺物実測図	16
1. 立地と層序	5	IV まとめ	17
2. 遺構	5	参考文献	
第4図 集石遺構1実測図	6	写真図版	
第5図 集石遺構2実測図	6	報告書抄録	

## I 遺跡の位置と環境

大山町は富山県の南東部に位置し、町の大部分は山地である。町境の東側を北流する常願寺川によって発達した河岸段丘が形成されており、高位段丘として栗巣野台地、下位段丘として上野段丘がある。またこの川によって形成された扇状地の扇頂部分に町の中心部である上滝地区が広がる。北が富山市、北東が立山町、南が岐阜県に接し、東西約410km、南北約275km、面積は約575km<sup>2</sup>である。



No	遺跡名	時代	No	道路名	時代
1	原岱跡	縄文(後・晩期)、中世	13	門ノ本郷	縄文、中世、近世
2	原	縄文(前期)	14	野口	縄文(前・中期)
3	与四兵衛(吉部)山	中世	15	不動平B	縄文(中・後期)
4	元本近寺跡	中世	16	不動平A	縄文(中・後期)
5	花切	縄文(中・後期)	17	吉屋敷Ⅱ	縄文
6	小見城跡	中世	18	吉屋敷Ⅲ	縄文(中・後期)
7	亀谷	縄文	19	古屋敷Ⅳ	縄文(前・後期)
8	亀谷銀山跡	近世	20	古屋敷Ⅰ	縄文(前・中・後期)
9	和田	縄文(中期)	21	西新寺城跡	中世
10	小見大丸山城跡	中世	22	札井殿山城跡	中世
11	中地山城跡	中世	23	池田城跡	中世
12	千垣堀跡	縄文			



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:50,000)



第2図 遺跡周辺の地形図 (1:2,500)

原砦跡は、原集落の北西約700m、標高約420mの地点に所在する。常願寺川とその支流の牛首谷川との合流地点に張り出した丘陵部分にあたり、川に面した三方はいずれも急崖である。常願寺川の河床との比高差は約65mである。南東側は、栗巣野から原まで常願寺川中流に発達した高位段丘が続き、その台地の先端から約30mの下りの急斜面となっている。

周辺の遺跡としては、常願寺川の高位段丘である栗巣野台地の緩斜面上に花切遺跡（縄文中～後期）と原遺跡（縄文前期）がある。また常願寺川右岸にも中位・古屋敷段丘上に野口遺跡（縄文前～中期）や不動平遺跡A・B地点（縄文中～後期）、古屋敷I～IV遺跡（縄文）などの縄文時代の遺跡が密集している。

当遺跡の西方には、常願寺川とその支流の合流点を臨む形で小見城、小見丸山砦跡、中地山城といった中世の山城跡があり、また東方の元本宮寺跡、与四兵衛山（吉部山）、常願寺川対岸の芦峰寺集落は古代から中・近世に山岳信仰の対象であったと思われる地である。

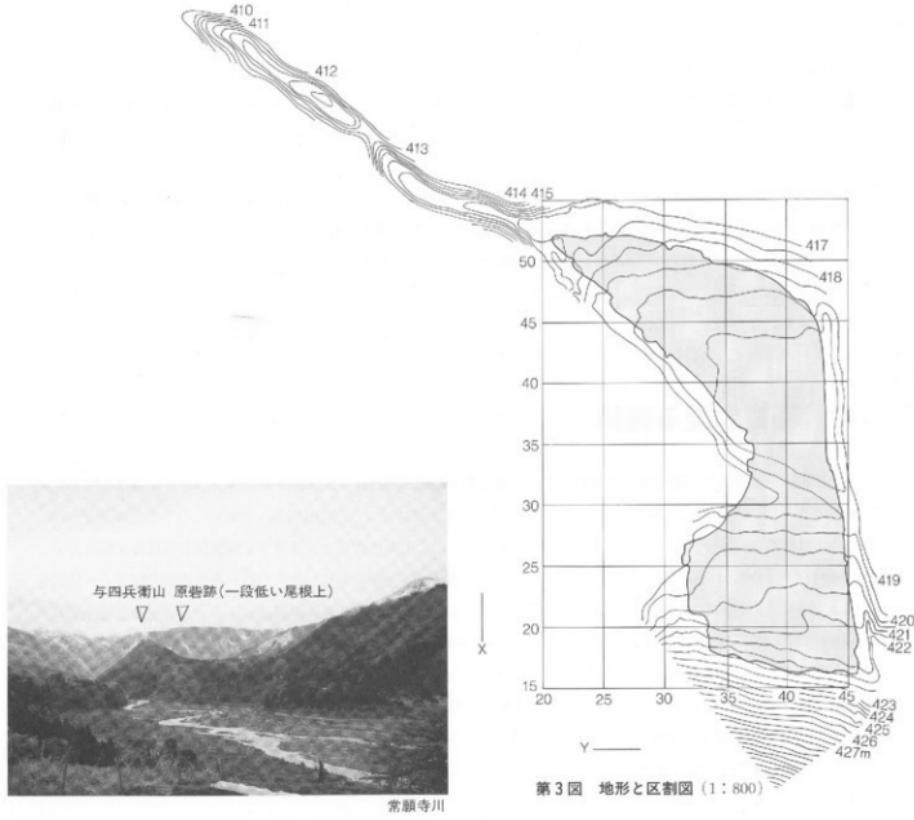
## II 調査に至る経緯

原砦跡が立地する大山町原から栗巣野にかけての常願寺川左岸側には「2000年冬季国体」のメイン会場となる立山山麓スキー場があり、右岸側の立山町芦峰寺には「立山風土記の丘」、「立山博物館」があり、また3.5km上流には、立山黒部アルペンルートの拠点となる立山駅がある。現在、この高位段丘上に位置する両地区を直接結ぶ橋ではなく、川を渡るには約2.5km下流の芳見橋か、約3.5km上流の藤橋へ向かう必要がある。そのため、両岸の観光拠点の一体化を図ると共に、冬季スキーシーズンにおける渋滞を緩和することを目的として、昭和58年ころから主要地方道宇奈月大沢野線の立山町芦峰寺から大山町原間の全長1.7kmの桜塚橋の架設をはじめとした道路の新設計画が進んできた。

これを受け、富山県埋蔵文化財センターで昭和59年10月1日～9日に原砦跡の、昭和61年に原遺跡の試掘調査を実施した。この後地質調査や計画道路の設計を進めて平成6年に道路法線が決定し、試掘調査の結果に基づき、平成7年4月に富山県埋蔵文化財センターにおいて富山県富山土木事務所・同立山土木事務所と富山県埋蔵文化財センター、大山町教育委員会で協議を行い、平成7・8年度に原砦跡の発掘調査及び原遺跡の試掘調査を実施することになった。

当遺跡は三方が川に面した急崖でまた周囲が山林であったために、平成8年6月からまず現地の木を伐採し、調査用の階段・安全柵の設置及び仮設道路の建設などの事前整備作業を行った。地形測量を行った後に、ヘリコプターを導入して伐採した樹木の搬出、小型バックホウの搬入を行い、バックホウで堀切部分を除いた箇所の表土掘削を行い、再度ヘリコプターでバックホウの搬出、ベルトコンベアをはじめとする調査器材の搬入を実施した。

発掘調査面積は約2,500m<sup>2</sup>で調査区の形状から任意に10m間隔に基準杭を設け、X軸を南東～北西方向に、Y軸を南西～北東方向にとり2×2mを1区画と設定した。発掘調査は10m間隔の基準杭に沿ってトレーナーを設けて層位の確認を行った後、人力により各区の表土除去、遺物包含層の掘削を行った。その後上層（推定中世面）及び地山上面での遺構確認作業を実施し、さらに遺構ごとにその検出作業を行った。また堀切箇所は全面掘り下げを行った。調査期間は平成8年7月15日から9月20日である。



原岩跡遠望(西方、芦嶋寺より)



### III 調査の概要

#### 1. 立地と層序（第6図）

東方の標高約450mの高位段丘から約30m下る島状に張り出した小丘陵上に調査区があるが、周囲の高位段丘には杉林が広がっているのにここには広葉樹が生い茂っている。標高は約418m～422mで東方の高位段丘から続く急斜面から西に向かって緩やかに傾斜している。全長約80m、幅約20mの平坦部を幅約12m、深さ約1.5mの谷（堀切状遺構）により区切られている。

調査範囲は原谷跡のほぼ全域にあたるが、堀切跡と推定されている西側の尾根の谷地形については道路改良工事事業の掘削範囲外であるため調査対象地とはなっていない。ここでは地形測量図のみを掲載した（第3図）。この西側の尾根は人が1人歩くのがやっとの細尾根で、両側は常願寺川と牛首谷川に面した急崖になっている。

層序は、第1層：暗黒褐色砂質土、第2層：黒色粘質土（シルト質）、第3層：黒褐色粘質土（シルト質）、第4層：暗褐色粘質土（シルト質、漸移層）、第5層：黄褐色粘質土（地山）となっており、第3～4層が遺物包含層である。堀切状遺構部分と北側の平坦部分の第3層からは炭化物がブロック状に混入しているのが確認され、第4層上面に焼土層が堆積している箇所も見られた。また、第2層下部から第4層上面にかけて手の平大から50cm四方までの石が大量に埋まっていたが、調査区北側の平坦部にはあまり見られない。

#### 2. 遺構

##### (1) 繩文時代の遺構（第4・5図）

縄文時代の遺構には、はっきりわかるものはあまりない。集石遺構が2箇所あるのみである。

集石遺構1は15～30cm程度の河原石が多く使用されていて、石の大きさが揃えられているという印象は薄い。石の中には、粘板岩質の石を細く割って用いているものも見られる。石圓炉址である可能性もあるが、石で囲った部分に掘り方はなく、火熱を受けたと思われる石や焼土層も見られない。集石遺構の下にも明確な遺構の輪郭等は検出できなかった。石で囲った部分や石のすきまからは縄文時代晩期初頭を中心とした土器群が出土している。

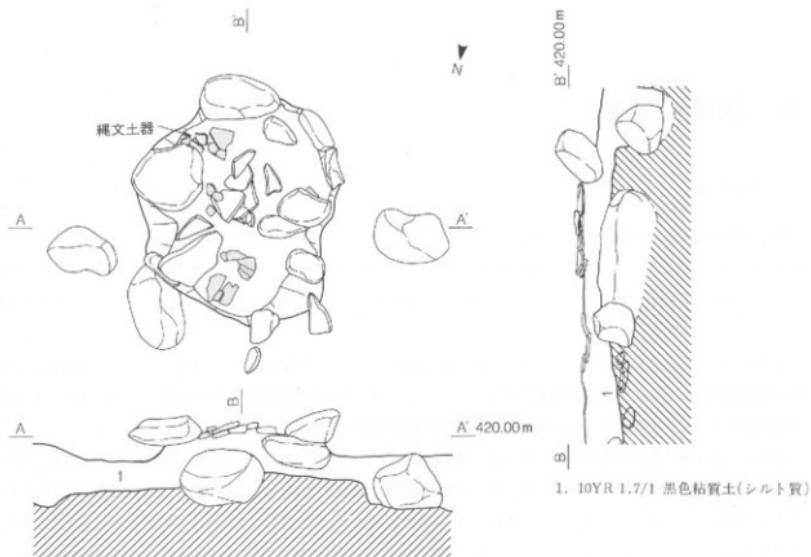
集石遺構2は粘板岩質の割石をやや斜めに並べて寝かせたものである。下は深さ約1mの土坑となっており、土坑の上部に持込んだ石を敷き並べたものと思われる。石のすきまや周辺からは縄文時代後期後葉～末葉を中心とした土器が出土している。遺構との関連で一括遺物とすべきものはない。

穴は全部で64箇所確認できたが、うち2箇所は風倒木であろうと思われる。穴の多くは暗褐色粘質土層下位段階で検出しているが、暗褐色粘質土層中位段階で検出したものもあり、これらはもっと新しい時代のものになるかもしれない。

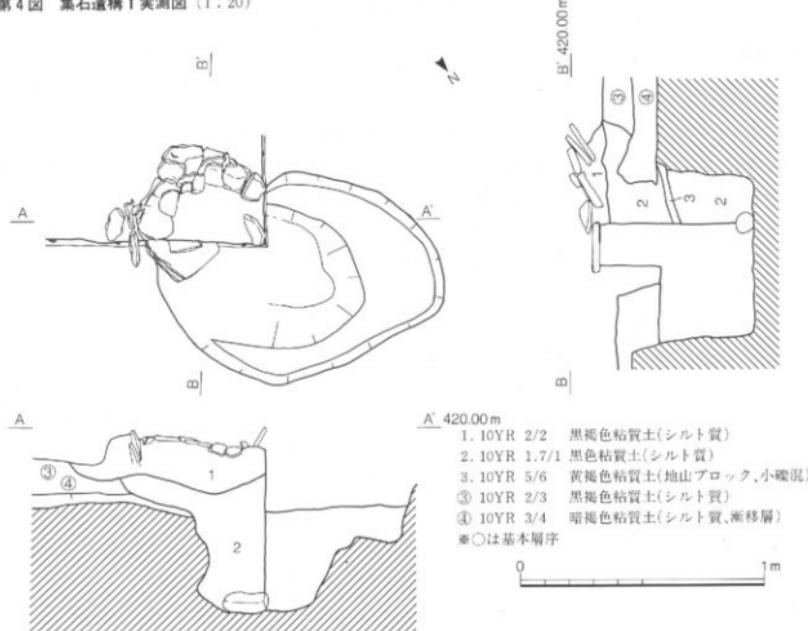
##### (2) 中世の遺構（第7図）

堀切状遺構以外に皆に関すると思われる遺構は確認できなかった。堀切状遺構で囲まれた平坦地の規模は約50×20mで、面積は約800m<sup>2</sup>である。中世面と思われる暗褐色粘質土上面では、石もなく平坦である。暗褐色粘質土層の中位段階でX39Y36の地点を中心に半径5mの範囲で穴が数箇所確認でき、中世のものとも考えられるが、柱穴とは見させなかった。また、この平坦地の黒褐色粘質土層からは炭化物がブロック状に混入しているのが確認され、X47Y36付近とX50Y24付近では暗褐色粘質土層上面に明確な焼土層が堆積しているのが見られた。

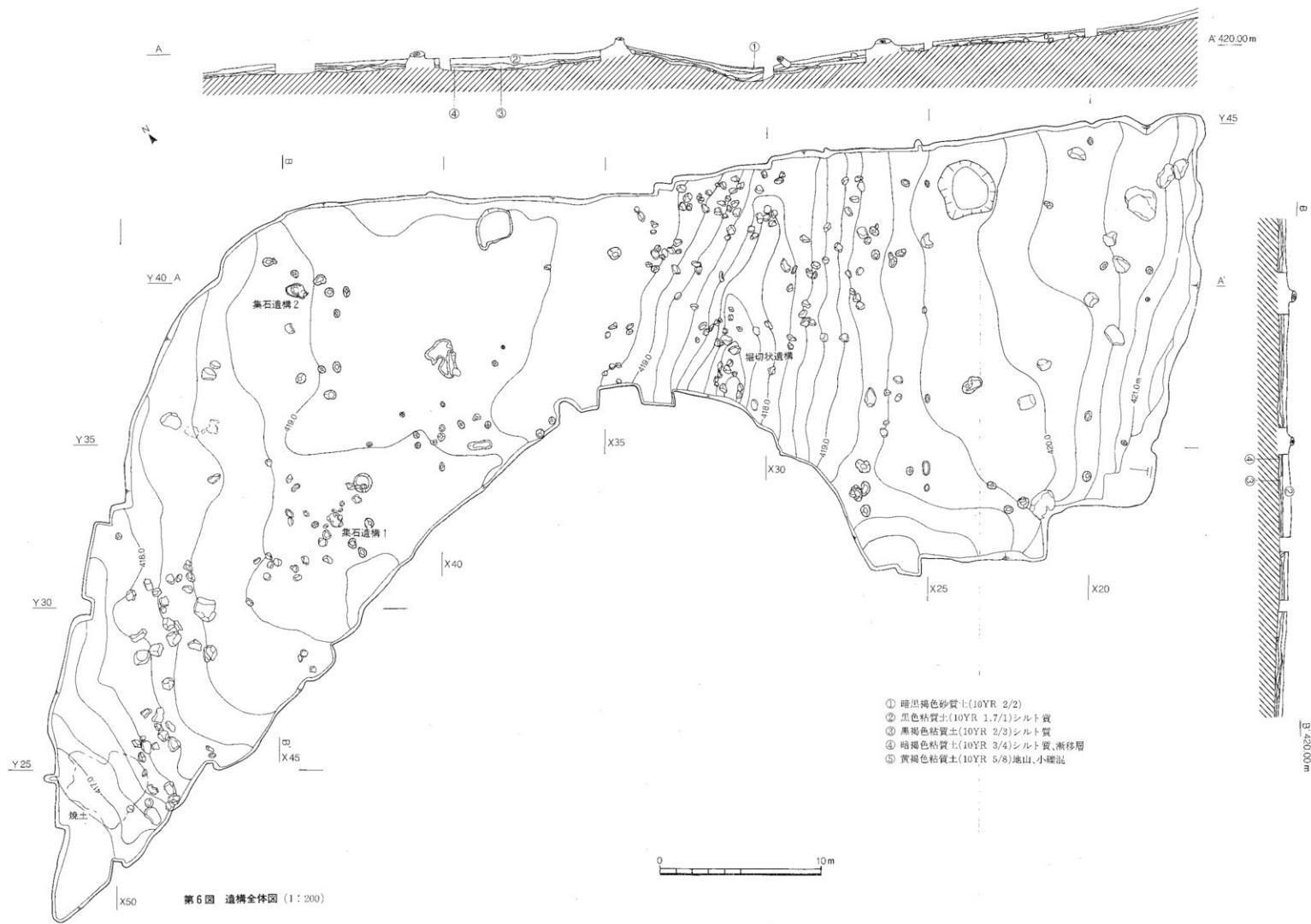
堀切状遺構は自然地形を利用したもので、空堀状である。方位は南北方向を主軸とすると、N-52°-Eをとる。検



第4図 集石遺構1実測図 (1:20)



第5図 集石遺構2実測図 (1:20)



出した長さは15.0mを測る。堀幅は上場が最大で約15.0m、最小で約11.5m、下場が1.5mほどである。もともと南東側は東の高位段丘の斜面から緩やかに傾斜してくる地形になっており、堀切状遺構部だけを明確に分けられない状態である。深さは西側で約2.0m、東側で約1.1mで東側は比較的浅く、土橋も検出できなかつたためここを通り道にしていたと思われる。また堀の北側部分では幅約1.6mの平坦部があり、その下には堀の斜面に沿った形で20~40cmの自然石が散在しており、南側には幅約2.0mのテラス状の平坦部を設けて二段掘りにしていたようである。

堀切状遺構の埋土はY37、Y40、Y43に設定した土層観察用畦で確認した。遺構内に老齢の広葉樹が数本あったため、断面のつながりが途切れがちになっている(第7図)。第1層暗黒褐色砂質土及び第3層黒色粘質土が表土である。第4層暗褐色粘質土から第8層褐色粘質土が堀の埋土である。

掘方付近からも穴を14箇所検出しているが、掘に伴う施設の跡であるかは不明である。なお、土壙や構跡は検出できなかった。

### 3. 遺物

今回の調査では、中世の砦の時代に関する遺物は一点も出土していない。出土した土器は縄文時代後期初頭から晩期前葉にかけてのものである。石組遺構1・2より検出したもの以外はほとんど包含層から出土したものであり、全体の器形を復元できるものもわずかである。

#### (1) 土器 (第8~10図、図版第6~8)

石組遺構1 (第8図1~10) 縄文晩期初頭~前葉の勝木原式、御経塚式に比定できるものを中心としている。

1は平口縁の深鉢で、口縁部に平行な二条の沈線を引きその間にR L継縄文を施している。気屋式に比定できるものと思われる。

2は口縁部が緩くくの字形に屈折した鉢器形で、口唇部分は平坦に面が取られている。摩滅が著しく文様ははっきりしない。

3~6は脇部が張って頸部がしまり、口縁部は緩く外反する深鉢の胴部破片であると思われ、磨消縄文帯に三叉文や入り組文を組み合わせて施文するものと思われる。4は列点文と三叉文を入り組ませて施文してある。御経塚式に比定できる。

8・9は口縁部が肥厚する無文の浅鉢で内外面とも丁寧な磨き調整が施されている。9は口唇部に目の細かい縄文が施され、粘土紐を張り付けてある。おそらく御経塚式段階のものであると思われる。

10は口縁部がほぼ直立するバケツ形の粗製深鉢である。口縁部外面にナデ調整を施し、以下を粗い条痕を丁寧に継引きしている。

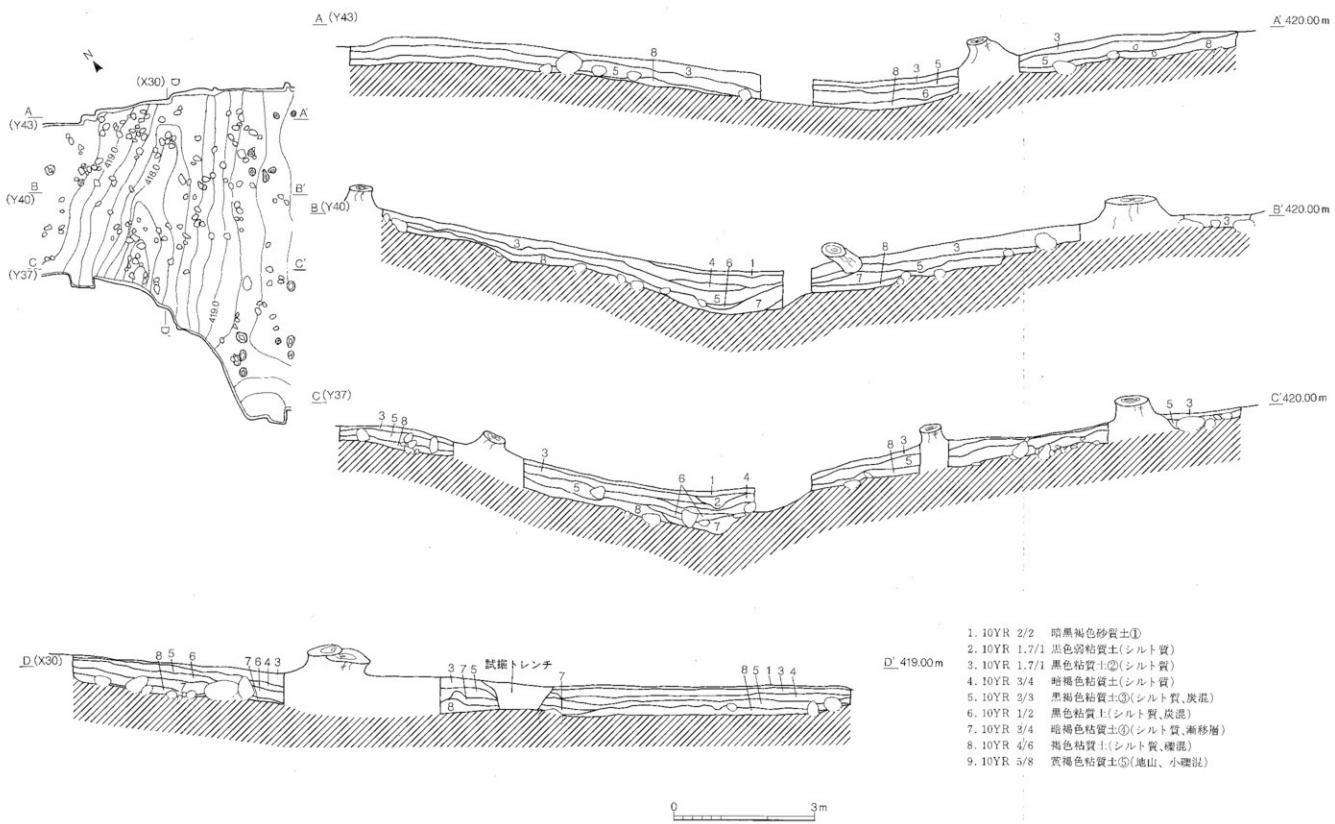
石組遺構2 (第8図11~14) いずれも粘板岩質の割石の間から出土したものである。縄文後期末葉の八日市新保式に比定できるものを中心としている。

11は口縁が外反し胴上部がやや張り出した器形で、口縁上部は幅狭で直立しておりここに右下がりのR L縄文を転がしている。胴部にもR L斜位の縄文を転がしており、縄文施文後に胴上部に幅広の沈線をめぐらし上下の沈線が連結して梢円状の区画をつくっている。沈線を分断する文様はX字状文に似る。口辺部は無文である。八日市新保I式に比定できるものと思われる。

12は口縁部がくの字形に屈折した浅鉢で、口縁部に端で緩い弧を描く2条の沈線を引いている。沈線は縦の短線で分断されており、この短線で囲まれている部分にR L縄文が施されている。

13はおそらく波状口縁の浅鉢形土器で、口縁部と胴部に陵をつくらず口縁部が内湾した碗状の器形になると思われる。波頂部には刻みが施されている。波頂部内に多線条化した細い沈線による弧線文を施している。





第7図 堀切状造構実測図 (平面1:300、断面1:80)

穴14（第8図15）15は山形の波状口縁で波頂上部に刻みをもつ。口縁部は摩滅しているが、波頂中央には円形圧痕文が施され、口縁端部には縄文がめぐる。

#### 後期初頭（第9図16）

16はおそらく波頂が4単位で平面は梢円舟形を呈するものと思われる。下部は欠損しているが、底部は丸底に近いものかまたは台が付く鉢器形になると思われる。串田新式に特徴的な双頭波状口縁を呈し、口縁部には三角形連続刺突文をめぐらせていているが、丁寧な磨き調整が施されており後出のものと思われる。

#### 後期後葉～末葉（第9図17～21）八日市新保I式に比定できると思われるものである。

17は口縁部がくの字形に緩く屈折した鉢形土器で、口唇に肥厚しない二個一对の小さい瘤をもつ。口縁部には二条の沈線を引きめぐらし、上下の沈線が連結して沈線を区切っている。

18は口縁部で立ち上がりをつくっている無文の鉢で、波状口縁となる。

19は深鉢の胴部破片と思われ、やや張り出した胴上部に沈線を引きめぐらし、胴部以下にR L斜縄文を転がしている。

20・21は鉢器形と思われ、体部の縄文地に弧状の沈線区画を施し、区画内を磨り消している。20は赤彩されている。

#### 晩期初頭～前葉（第9図22～第10図32）勝木原式、御経塚式に比定できると思われるものである。

22～24は三叉文が配される晩期初頭の土器と思われる。22は口縁部がやや外反した深鉢と思われ、口唇上部に1条の幅広の沈線を引いている。口縁部は沈線がめぐり口唇部との間を縄文帯としている。23は山形の波状口縁深鉢で、波頂部に沈線をめぐらし口縁端部に縄文を施している。24は胴上部で緩く括れ、口縁部が外反する波状深鉢と思われる。目の細かい縄文が口縁部から胴部に施され、その上から幅広沈線が引かれている。

25は口縁が内屈する平線の浅鉢であるが、小さい突起が付くようである。口唇部が内面に向かって肥厚し、口縁部の平行沈線間に列点文を二段めめぐらしている。体部下半にも二段の列点文がめぐる。体部の弧線区画内には目の細かい縄文が施文されている。無文部や内面は丁寧な磨き調整が施されており、外面は赤彩されている。中屋式に含まれるものかもしれない。

26・27・31は口縁部が肥厚する無文の浅鉢であり、内外面とも丁寧な磨き調整が施されている。27は口縁部まで直線的に開いた浅鉢で底部は丸底になる。口唇部分は平坦に面が取られている。

29・30・33は底部破片であり、29は内面に炭化物が付着している。32は外面に斜条痕が走っている。

32は太目のR L斜縄文を全面に転がした粗製深鉢で、縄文地文の上から口縁と平行に棒状施文具の粗い撫でによる浅い沈線を施している。

#### 原遺跡試掘トレンチ（第10図34）

原遺跡の試掘トレンチより出土したものは3点あるが、そのうち時代が判別できるものは34だけである。34は半截竹管による半隆起線文で施文する深鉢胴部破片である。縄文前期後葉前半の福浦上層式に比定できる。

#### （2）石器（第10図35～39）

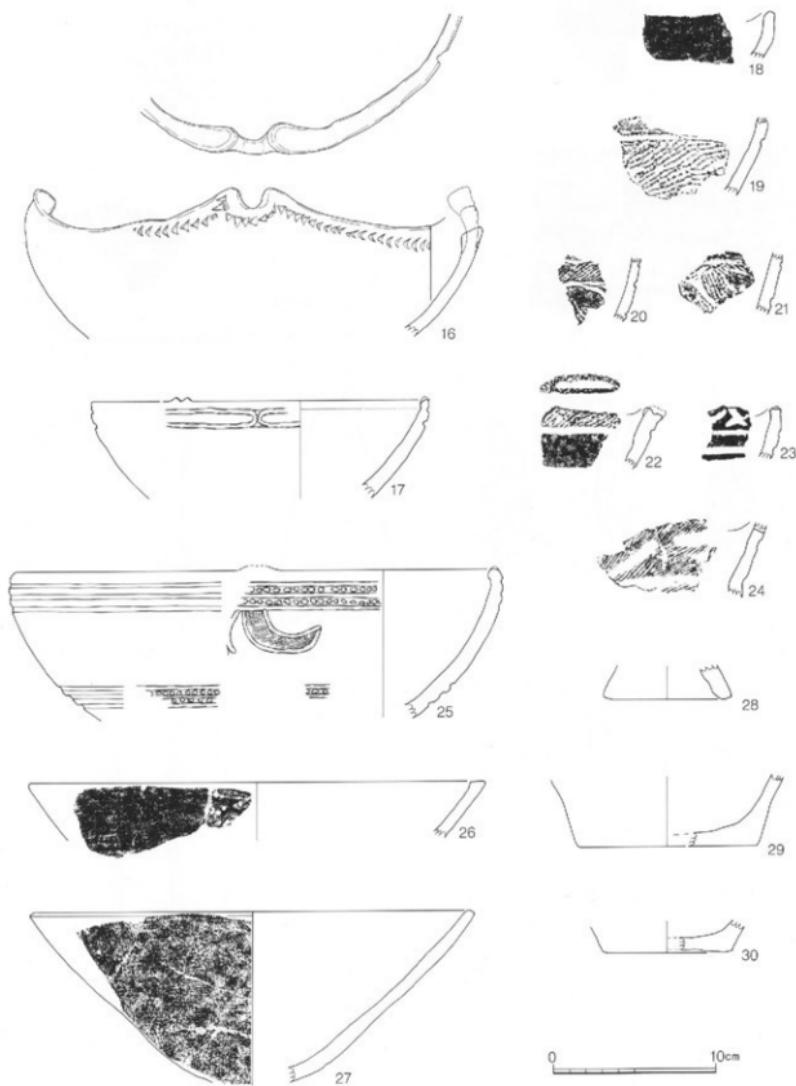
##### 石鏸（第10図35）表探したもので、石材はチャートである。

磨製石斧（第10図36～38）いずれも定角式である。36は長さが3.8cm、重量11.7gを測る小型のもので、石材は蛇紋岩である。37は刃部の検出だけであるが、頭部・刃部の幅がほぼ等しい短剣型を呈するものと思われる。石材は蛇紋岩である。38は刃部の刃先を欠損しているが櫛形を呈する。石材は不純石灰岩である。

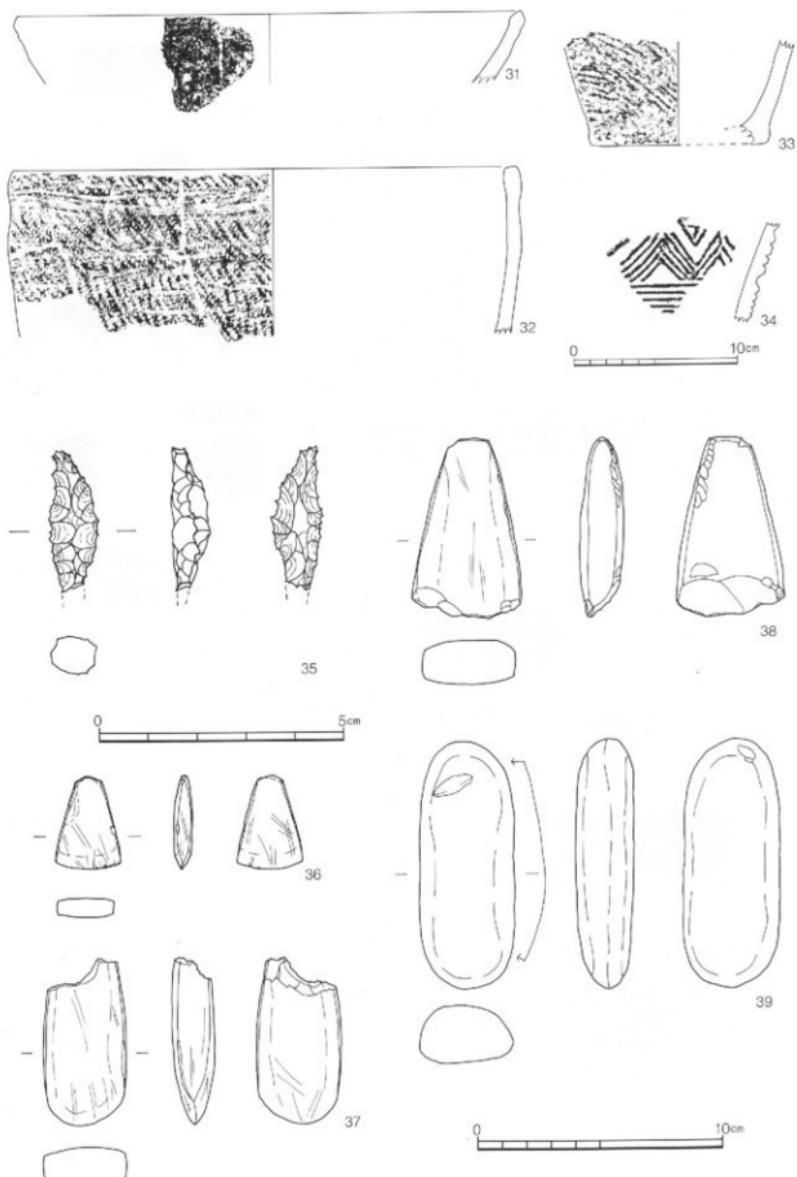
擦石（第10図39）楕円形の櫛の側縁を使用したものである。長さ10.4cm、幅3.9cmで、砂岩質の石材である。



第8図 遺物実測図 (1:3)



第9図 遺物実測図 (1:3)



第10図 遺物実測図 (土器 1:3、石器35 1:1、36-39 1:2)

## IV まとめ

以下、今回の成果を要約してまとめとしたい。

1. 岩に関する遺構は不整形であるが自然地形を利用した掘切状遺構があり、それに続いて平坦面が広がっている。遺物の出土はないがおそらく人為的に削平したものであると思われる。中世における岩にあたるかは不明であるが、一時的に使用されたもので、日常的な居住地ではないと思われる。
2. 原岩跡に関する文献史料や伝承は確認されていない。原岩跡から対岸の芦崎寺城をはじめとする周辺の山城は山の陰に隠れて見ることはできない。また、原岩跡のように台地から1段低くなった地に出城や岩を設けている例はほとんどないようである。
3. 当遺跡は常願寺川と牛首谷川との合流地点に張り出した丘陵部分にあたり、川に面した三方はいずれも急崖である。当遺跡より常願寺川下流の西方には飛驒から進出してきた江馬氏家臣の居城であった中地山城、小見城があり、原岩とは常願寺川とその支流の合流点を臨む険しい地形にあることが共通している。また常願寺川対岸には交通要所にあり、立山信仰と関わりが深く大きな勢力を有した芦崎寺集落があることも注目される。  
こうした立地などから、原岩跡は越中へ進出した飛驒の江馬氏が中地山城を本拠として対岸の芦崎寺に備えるために常願寺川沿いに設けた出城であり、その構築時期は江馬氏が芦崎寺を支配する池田城主寺鳩氏と敵対関係に入った永禄十二年（1569）頃である可能性が高いとした考えがある（高岡1990）。
- 当遺跡の西側の尾根は1人通るのがやっとの幅であるが、常願寺川と牛首谷川との合流地点までぬけられるようになっている。かつての常願寺川は左岸の段丘から緩やかに傾斜して川幅も現在より狭く、河床との比高差も小さかったようである。左岸側の原より西方に本宮集落があるが、中世には原岩と牛首谷川を隔てた台地上の上本宮の地に集落があったらしい。原岩跡の東方には山岳信仰の対象となった与四兵衛山（吉部山）や元本宮寺跡があり、もともと原岩のあった場所は上本宮などから来る通過点となっていたことも考えられる。
4. 縄文時代の遺構は集石遺構2箇所で、いずれも粘板岩質の割石を使用しており、石のすきまからは縄文時代後期後葉～晚期前葉の土器が出土している。穴64箇所もほとんどがこの時代のものと思われる。
5. 縄文時代の遺物はコンテナ6箱分で、ほとんどが包含層からの出土である。  
縄文土器は後期初頭～晚期前葉のものがある。晚期前葉のものが中心で、精製の浅鉢の占める割合が比較的多いのが特徴である。  
石器は全て縄文時代のものであるが、出土数は少ない。
6. 縄文時代においては、当遺跡はキャンプサイト的な性格のものであったと思われる。常願寺川左岸の当地周辺では縄文前期後葉（原遺跡）、中期中葉～後期初頭（花切遺跡）の遺跡が確認されているが、現在までに後・晚期で確認されているのは当遺跡だけである。

## 参考文献

- イ 池野正男・柳井睦 1976 「富山県立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 石原与作 他 1964 「第二章 中世の郷土」『大山町史』 大山町
- カ 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 「江馬氏城館跡」
- 狩野睦・酒井重洋 1991 「Ⅲ 土器各説」『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編 6—境A遺跡土器編』 富山県教育委員会
- 狩野睦・島田修一 1988 「富山県大山町花切遺跡発掘調査概要」 大山町教育委員会
- 狩野睦・神保孝造 1995 「東黒牧上野遺跡A地区」 大山町教育委員会
- キ 木下良 他 1981 「富山県歴史の道調査報告書—立山道—」 富山県教育委員会
- ク 久保尚文・山元重男 1990 「第二章 大山の古代・中世」『大山の歴史』 大山町
- コ 小島俊彰 1979 「滑川市史」考古資料編
- 小島俊彰 1981 「井口式土器」「縄文文化の研究」
- タ 高岡徵 1980 「富山県」『日本城郭大系』第7巻 新人物往来社
- 高岡徵 1990 「富山県大山町中世城館調査報告書」 大山町教育委員会
- 高堀勝喜 1983 「野々市町御経塚遺跡」 野々市町教育委員会
- 高堀勝喜 1986 「第6章 第1節 北陸の縄文土器編年」『真脇遺跡』 能登町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団
- ニ 西野秀和 他 1989 「金沢市米泉遺跡」 石川県埋蔵文化財センター
- ハ 橋本正・酒井重洋・久々忠義 1980 「富山県井口村井口遺跡発掘調査概要」 井口村教育委員会
- ヒ 久田正弘 1986 「井口Ⅱ式期、井口Ⅲ式期、八日市新保式期、御経塚式期、中屋式期」『真脇遺跡』 能登町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団
- マ 増山仁・南久和 他 1986 「金沢市新保本町チカモリ遺跡—第4次発掘調査兼土器編一」 金沢市教育委員会
- ミ 渡辺晨 他 1971 「愛本新遺跡調査概要」 富山県下新川郡宇奈月町教育委員会
- 三鍋秀典・瀬戸智子 1993 「古屋敷Ⅲ遺跡—発掘調査報告」 立山町教育委員会
- 三鍋秀典・瀬戸智子 1994 「古屋敷Ⅳ遺跡—発掘調査報告」 立山町教育委員会
- 南久和 1989 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
- モ 森秀典 1990 「吉峰遺跡—第7次発掘調査報告書—」 立山町教育委員会
- ヤ 柳井睦・池野正男・久々忠義 1977 「富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要」 大沢野町教育委員会
- 山本正敏 1990 「安居五百歩遺跡I」 福野町教育委員会
- ヨ 米沢義光 1986 「気屋式期、気屋Ⅱ式期、加曾利B1式並行期、酒見式・井口式期」『真脇遺跡』 能登町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

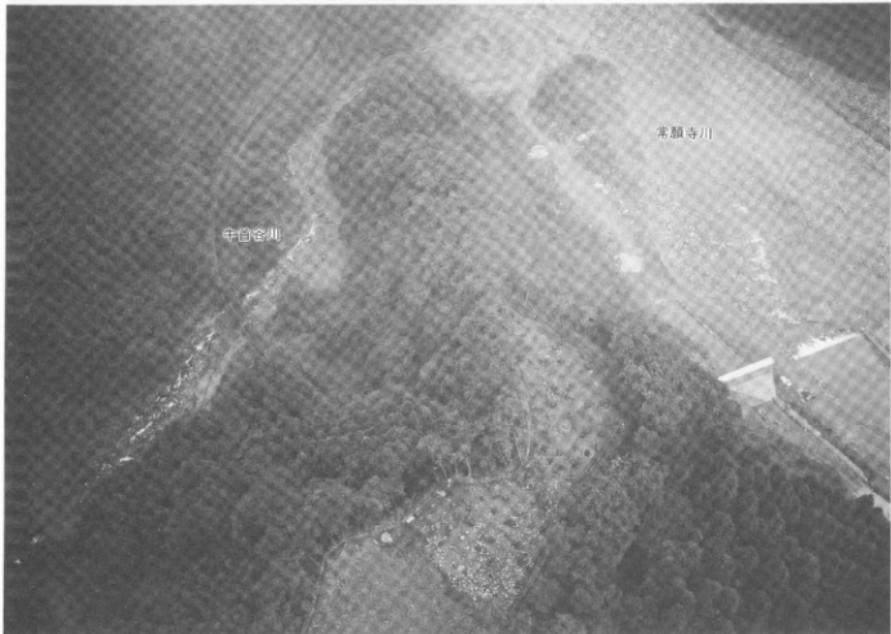


図版 1

平成 6 年撮影



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



調査区全景



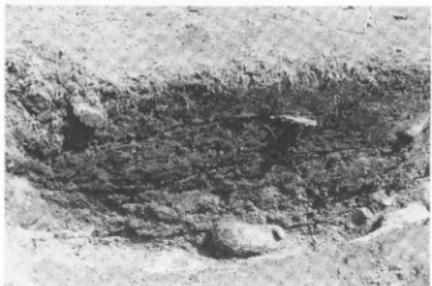
堀切状遺構(東から)



堀切状遺構(南東から)



堀切状遺構(南から)



堀切状遺構断面(X43)



堀切状遺構断面(X37)



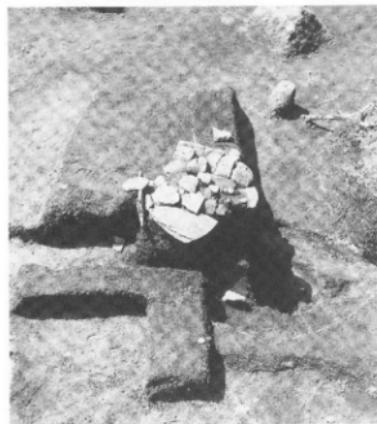
堀切状遺構断面(X40)



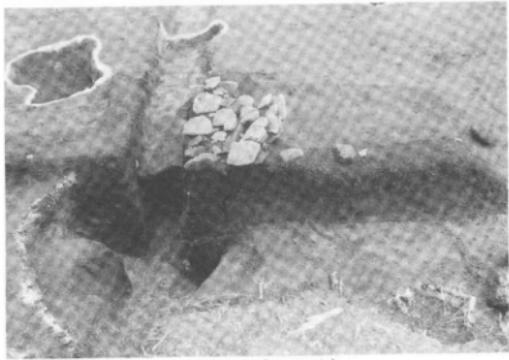
集石遺構 1(北西から)



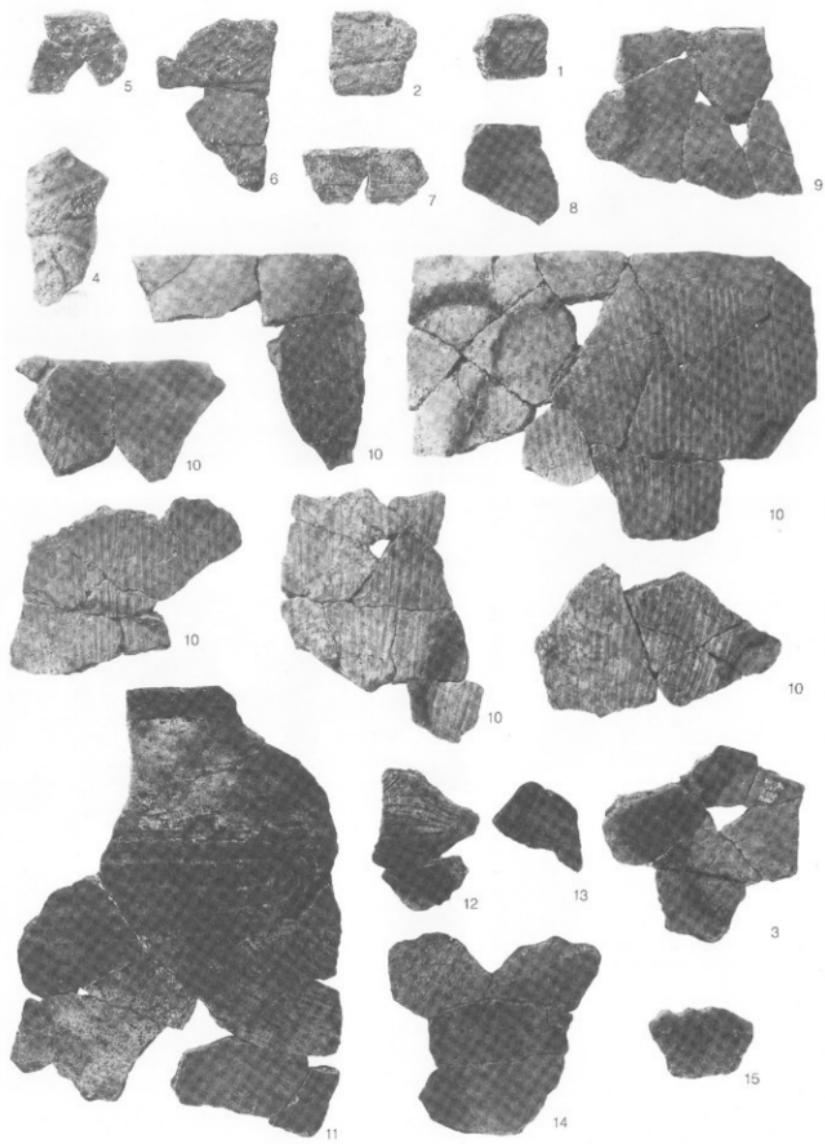
集石遺構 1(北から)



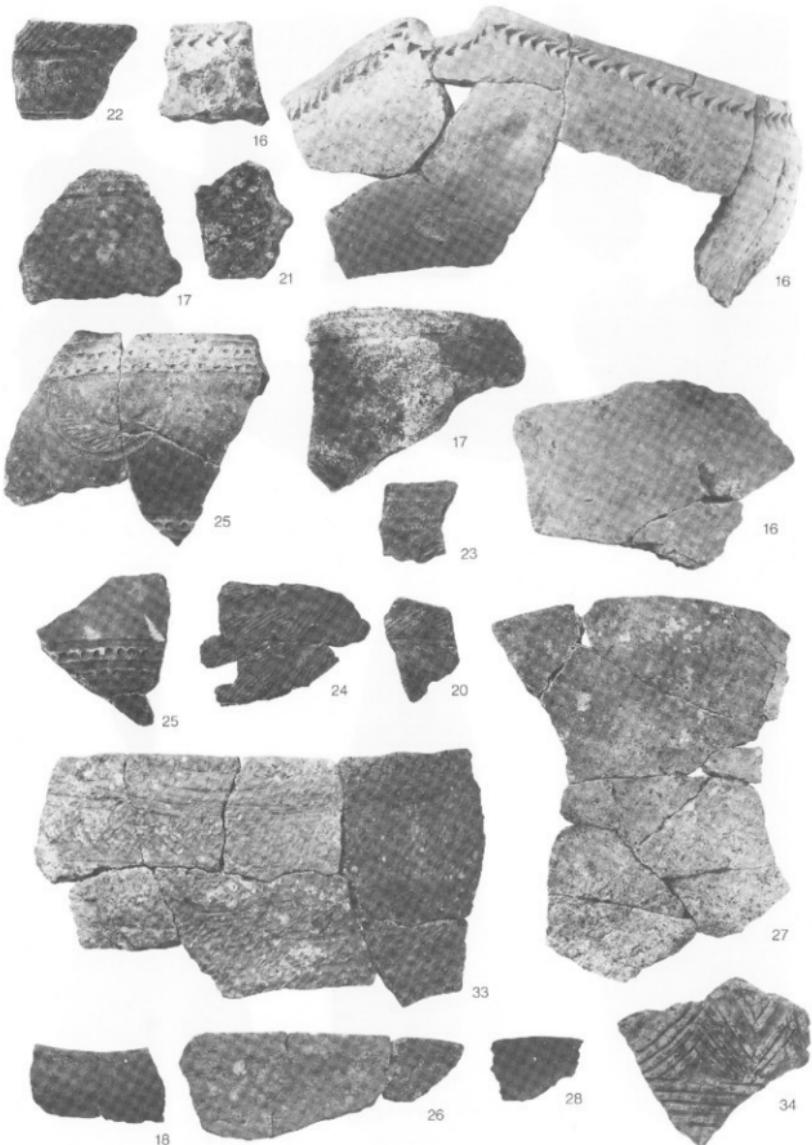
集石遺構 2(北東から)



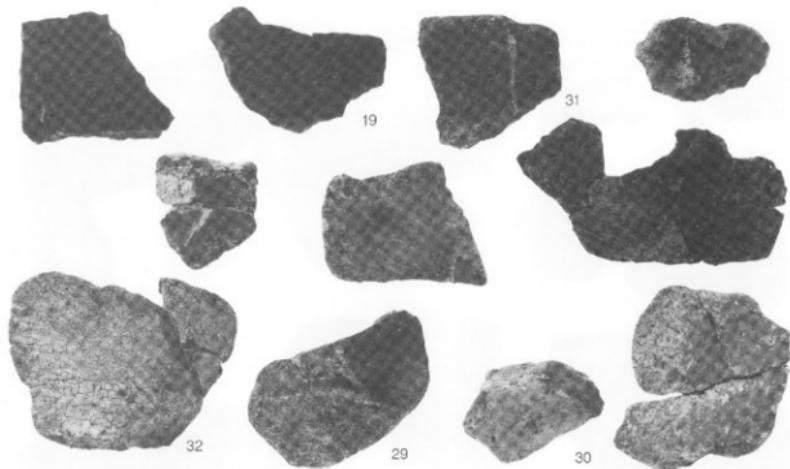
集石遺構 2(北西から)



図版 6 遺物 1~10.集石遺構 1 11~14.集石遺構 2 15.穴14 (1/2)



図版7 遺物 34.原遺跡試掘トレンチ その他.包含層 (1/2)



図版8 遺物 19・29~32.包含層(1/2) 35.表様・36~39.包含層(1/1)

報告書抄録

ふりがな	しゅようちはうどううなづきおおさわのせんどうろかいりょうこうじ(ごくらくばしけんせつ)にかかるまいぞうぶんかざいはくつちようさとやまげんおおやまちはらとりであとはくつちようさかいよう							
書名	主要地方道宇奈月大沢野線道路改良工事(橋梁橋建設)に係る埋蔵文化財発掘調査 富山県大山町原砦跡発掘調査概要							
編集者名	野中由希子							
編集機関	大山町教育委員会							
所在地	〒930-13 富山県上新川郡大山町上滝523							
発行機関	大山町教育委員会							
所在地	〒930-13 富山県上新川郡大山町上滝523							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
原砦跡	富山県上新川郡 大山町本宮向横引割	302	051	36度 34分 34秒	137度 24分 37秒	19960715 19960920	2,500m <sup>2</sup>	主要地方道 改良に先立 つ事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
原砦跡	散布地	縄文時代 後・晚期	集石遺構 穴	2基 64箇所	縄文土器、磨製石斧、石鎌、擦石			
	砦跡(?)	中世(?)	堀切状遺構	2箇所	-----			

## 富山県大山町原砦跡発掘調査概要

大山町埋蔵文化財調査報告7

—主要地方道宇奈月大沢野線道路改良工事  
(極楽橋建設)に係る埋蔵文化財発掘調査—

発行日 平成9年3月31日

編集 大山町教育委員会

発行 大山町教育委員会

印刷 株式会社チューエツ